

～アイルランドおよび英国のきゅう舎を訪ねて～

軽種馬育成調教センター 技術普及課 小守 智志

J.M.Oxx きゅう舎 (アイルランド)

当きゅう舎では、以前はきゅう舎スタッフによってブレーキングが行われていましたが、平成20年秋の訪問時には、ギャリー氏 (英国) という、ブレーキングを専門にしているプロの方が行っていました。彼は「馬と会話する男モンティー・ロバーツ」と似たブレーキング方法をとっており、彼の息子と二手に分かれ、きゅう舎の乗り役2名とチームを組んで、

約40頭のイヤリング (1歳馬) をブレーキングしていました。彼のブレーキング方法は表1の通りで、約20分の短時間で騎乗まで出来るようにブレーキングしていました (写真1)。

表1 ギャリー氏のブレーキングの流れ

時間配分	5分	5分	5分	5分
実施内容	ロンジング	鞍による 胴締め	ダブルレーン	騎乗

約20頭のイヤリングを観た中で、大半はスムーズにブレイクされていましたが、うち3頭は感受性が強く、胴締めや騎乗の際には大暴れして、素直にブレイクさせませんでした。そのような馬は、片方の前肢を折りたたんだ状態で縛ることで3本肢にさせ、まともに暴れられない状況にしてから胴締めをしていました。その後、3本肢の馬は疲れて倒れ、倒れてからは鞭で叩き付けたり、踏みつけたりして(写真2)、主従関係を力づくで教え込んでいました。そして、馬が立ち上がると直ちにプリンカーを装着し、馬が動揺している状態のうちに騎乗するという方法が、3頭の馬にはとられてい



写真1 ブレーキング終了後の儀式



写真2 倒馬して踏んでいる



写真3 走路による騎乗馴致

ました。

以上までの内容を1日目で実施し、2日目は難しい馬のみ円馬場で同様の方法で実施した後、1周200m 走路に移り、リードホースなしで騎乗してガンガン走らせ、馬に考える余裕を与えさせずに騎乗に馴らす方法がとられていました(写真3)。スムーズにブレイク出来た馬の2日目については、馬装後ウォーキングマシーンにて1時間運動させ、走路では速歩を主体とした騎乗で終了していました。3日目は、全ての馬がウォーキングマシン運動後、走路にて軽めの運動となりますが、走路で暴れて上手く騎乗出来ない馬のみ円馬場でロンジングしてから、再度走路で運動をするといったやり方がとられていました。

ギャリー氏によると、3日間でブレーキングは終了とのことで、ブレーキングは胴締めさえ完了したら、あとは乗り役がいかにも上手く騎乗して馬を馴らすかであると教えてくれました。私も2日目から10頭騎乗しましたが、ハンドル・ブレーキ・アクセルがブレーキングによって出来上がっていない馬、すなわち完全にブレイクされていない馬を乗りこなす難しさと乗る恐怖心を、身をもって体験することが出来ました。この日、私を含めて4人の騎乗者によって40頭のイヤリングに騎乗しましたが、落馬や人馬転倒が幾度となく起きていました。

ギャリー氏によるブレーキング方法は、イヤリングを乗れるようにするが、人馬安全なブレーキングという私が求めていた観点とは違うものでした。しかし、実際アイルランドで、このようなスタイルがとられている理由としては、調教師が早くきゅう舎に入れて、自身の目が届く管轄下で調教を早く実施したいという現れであることがわかりました。

Kildangan Stud (アイルランド)

Kildangan Stud は、シェイク・モハメド殿下率いるダーレーグループの牧場であり、広大な敷地内には、種牡馬・繁殖馬・育成馬きゅう舎が点在していました。その中で、私は牡馬の育成馬きゅう舎(リカーズ・タウン;写真4)で2週間の研修を受け、馴致技術の体得に努めました。当きゅう舎は24頭の牡のイヤリングを7名のスタッフで管理しており、きゅう舎長のジム氏が中心となって仕事をしていました。ブレーキング担当主任は、英国のマイケル・スタウトきゅう舎にて、長く乗り役とブレーキングに携わってきた経験を持つミック氏であり、私は常に彼について研修させてもらいました。



写真4 きゅう舎外観

当牧場には、過去の研修報告書からの予備知識を持って研修に臨みましたが、牧場の基本的な理念・方針や馬匹管理方法は10数年前と全く変わっていませんでした。スタッフ全員が統一された馬への接し方をしており（2人1組のチーム作業など）、マニュアルに則り人馬安全をモットーとした管理体制は、現在のJRA日高育成牧場を思わせる組織的にしっかり基盤の整ったスタイルだと感じました。

ブレーキングの流れは各馬によって多少異なりはするものの、大筋の流れはJRA日高育成牧場のブレーキングと大きな差異はありませんでした。ブレーキングは日曜日のみ馬休日とした2週間（正味日数12日間）を終了の目安として行われており、ブレーキングが終了した馬は、馬装してウォーキングマシンへ約1時間半入れての運動が課せられていました。

Kildangan Studの育成馬きゅう舎では、ここ数年の方針として、鞍付けとドライビングまでのブレーキングのみを行い、その後は英国のニューマーケットにあるハミルトンヒルにて、騎乗馴致が実施されていました。そのため、ハミ付け・ロンジング・鞍付け・ドライビングといった一連の課程のみが集中して実施され、馬匹管理といった定期的なボディコンディションの確認やクリッピング・グルーミングにもたっぷり時間を費やされていました。

ブレーキングを実施する場所は20m程の正方形のリンクで行われており、1日目のロンジングは円馬場の方が馬は壁を頼って走れるので良いと感じられましたが、2日目以降については角馬場でも違和感なく実施することができていました。逆に、ダブルレーンに移行してドライビングに移る際には、四角い方が直線を利用したハンドリング操作を行う上で有効的であり、円馬場と角馬場を保有しているのであれば、その使い分けにより、より内容の濃いブレーキングが行えると感じられました（写真5）。



写真5 リンクでのドライビングの様子(左筆者)

Kildangan Studでは、人馬の安全をモットーとした上で、ブレーキングスケジュールに基づいて実施されていました。その中でも各馬の個体差により実施内容が変更されていました。そのことにより、馬は無理なく人の要求を受け入れられていました。従順な馬はおおむね1週間程度でブレーキングを終了し、難しい馬は2週間以上かけて行われており、ブレーキングは調教ではなく良いマナーを馬に教える「しつけ」であることを再確認することが出来ました。

Steve James きゅう舎（英国）

当きゅう舎は、ルカ・クマーニ氏、デヴィッド・シムコック氏等、名高い調教師やオーナーの馬を預かり、イヤリングのブレーキングと出産を控えた繁殖牝馬の馬匹管理を専門としている牧場でした。私が訪問した時は、7名のスタッフによって約30頭のイヤリングのブレーキングが行われていました。

ここでのブレーキング方法は、約2週間で走路での軽いキャンターが行えるところまでを実施するとのことでした。訪問時は、ほとんどのイヤリングがブレーキング終了間近であり、ドライビング後、騎乗馴致を行っている馬ばかりでした。前日まで行った内容を確認した後、リードホースを使用しながら新たなステップへと進んで騎乗馴致が行われていました（写真6）。ブレーキングは早朝から夕方までかけて全頭を実施しており、1頭当たり45分程で、各馬の個体差に合わせて確実に騎乗に馴らしていることがうかがえました。

きゅう舎長へ、ブレーキングを行う上で大切な事は何かと尋ねたところ、「馬の能力を引き出すのは調教を行うきゅう舎がすることであり、ブレーキングはその能力を最大限引き出せる義務教育をするステージである。だから、私はその馬達の良い先生でありたい。」と、話して頂きました。この



写真6 リードホースを使用しての走路騎乗

話については私も強く感銘し、ブレーキングの奥深さを痛感する事が出来ました。

Darly Pre-Training,Racing (英国)

ニューマーケットのハミルトンヒルにある当ファームは、アイルランドの Kildangan Stud の馴致馬や米国等からのシェイク・モハメド殿下の管理馬が約150頭集結しており、約50名の馬取り扱いスタッフによって調教が行われていました。スタッフは3つのチームに分けられ、各チームのきゅう舎長のもと、未調教のイヤリングやブレーキング終了馬の調教が実施され、ニューマーケットのジョッキークラブが管理する調教場とプライベートの調教場を利用していました(写真7)。このファームでは、きゅう舎に配属されるまでの馬が管理されており、イヤリングのみならず、きゅう舎への入きゅう待ちの3歳馬(未出走の馬)まで管理されていました。

当ファームに点在する施設は、300m程の周回走路、800m程の周回走路、円馬場8棟、ウォーキングマシーン3



写真7 調教場へ向かう様子



写真8 馬専用スパ

基、馬専用スパ施設1棟(写真8)、診療所1棟、きゅう舎5棟を有していました。場長のスーファニー氏の案内により、約2時間見学させていただき、Kildangan Stud 同様に人馬の安全を第一とした方針と併せ、充実した施設での馬匹管理体制には驚くばかりでした。

終わりに

私の競馬先進国に対する知識は、過去の報告書や諸先輩から教えていただいた競馬産業の実態でしかありませんでしたが、実際自身が観て体験できたことにより、漠然としていたイメージを明確化することが出来ました。

日本と研修先である両国での競馬サークルの仕組みが異なるのは当然でしたが、求めている最終目的は「強い馬づくり」と変わりませんでした。調教師が思い通りの調教を遂行していくためには、馬がそれに答えられる事はいうまでもありませんが、良い育成調教スタッフがいてこそ、馬の能力を引き出す重要な役割をしていることを改めて感じました。

私が研修した両国でのブレーキング担当者は、経験・技術はもちろん大変素晴らしかったのですが、さらに彼らの凄さを感じたのは、馬への接し方と瞬時の判断力でした。ブレーキングを例にあげると、Kildangan Stud でお世話になったミック氏は、胴締めを初めて実施するイヤリングに対し、開始したとたん何度と無く激しく跳ねた馬を(写真9)、オーバーワークになるからと言い、通常は両手前運動併せて15分程行うところを5分程で止め、ローラーを外しその日は終了としてしまった事がありました。私であれば、最低でも10分程度様子を観て胴締めを続けていたでしょうが、彼は明日この馬は出来るから今日無理しなくて良

いのだと言って、直ぐ終わってしまいました。次の日、その馬はミック氏の言うとおりに、最初から跳ねずローラーを受け入れていました(写真10)。

以上のように、私はプレーキングには様々な要素が必要となる中で、特に「観察力・忍耐力・判断力・経験」が大変重要な事であると感じたとともに、自分にまだまだ不足している事は「判断力と経験」だと痛感できた出来事でした。

今回の海外研修を終えて、日本の競馬産業のレベルは、

日本産馬が海外で活躍している現在、同じ土俵の上にいると、私は感じて日本に帰ってきました。しかし、土俵の上ではまだ、どっしり組み合うまでに日本のレベルが到達していないとも感じました。それは、競走馬の育成・調教に従事する人材の不足ということが壁になっていると思われました。この壁をどのように乗り越えれば良いのかはこの研修中に見出すことは出来ませんでした。今後の日本の競馬をさらに発展させる鍵だと私は感じました。



写真9 胴締め直後の様子



写真10 翌日の胴締め直後の様子